〔教育実践コラボレーション・センター〕採択

学校現場体験からみる心理臨床家の専門性

Specialty of Clinical Psychologist
—thinking through school field experience

研究代表者　西嶋　雅樹（D2）　　教員　桑原　知子
研究分担者　本多早由里（D1）　宮嶋　由布（M2）　越智　美幸（M2）
友尻奈緒美（M2）　長谷川千紘（M2）　永山　智之（M1）

〔研究目的〕

昨今、心理臨床家の存在はスクールカウンセラーなどの立場で学校現場に浸透してきている。そのため、学校現場における教師や心理臨床家の連携のあり方や、その専門性を考えていくことがますます求められている。

われわれはこれまで学校現場での心理臨床活動を考えるために、学校臨床研究会を立ち上げて独自に活動してきた。最近では、新たに心理臨床家が学校現場に入ったときに、どのように学校現場で足場を作っていくのかについて検討した研究や、学校現場における教師と心理職の視点に関する研究を行ってきた。また 2007 年の心理臨床学会第 26 回大会では、日本とスイスの両国における心理臨床家のそれぞれの特徴を調査研究による比較を通じて検討した。

しかし、単に職種という要因や国という要因を軸にした比較検討だけではなく、自らの学校現場での実践体験に今一度立ち返り、どのような体験がそこでなされているのかということを基点として自身の専門性を問い直す必要もあると考えられる。そのため、学校現場での実践体験ということに焦点を当てることで自らの専門性についての自覚を深めていくのが本研究の目的である。

〔研究経過〕

本取り組みでは、主に心理臨床の立場から学校現場に関わる大学院生が、それぞれの学校現場での体験を話題提供の形で報告し、それを受けて参加者でディスカッションを行うという形を繰り返してきた（以下この方法を現場体験報告と記す）。現場体験報告においては、「その都度どう関わるべきだったか」という技法的な観点からのみならず、

たとえば「そこで起きていたことはどのような意味をもっていたのか／何が起きていたのか」という観点からもディスカッションが行われた。こうしたディスカッションは、臨床心理学・心理臨床学における事例研究に類するものであったといえる。なお、現場体験報告には研究分担者以外にも、本研究科の臨床教育学専攻の大学院生田中史子・井上明美・東畑開人・森田健一・佐藤健・小西佳世・中藤信哉・菱田一仁・山本尚代、研究生の今西和美・吉田啓子、教育科学専攻の大学院生近藤千寿枝の参加を得た。後述する研究成果を得ることができたのも、これらの参加者の参加の賜である。

また、上記の取り組みとは別に、学校現場で心理臨床活動を行うための知識を得るために、外部講師を招聘して 2008 年 1 月 30 日に京大会館でシンポジウムを実施した。シンポジウムのテーマには、近年学校現場で急速に着目を浴びている発達障害をとりあげ、このテーマに詳しい十一元三教授に講師をお願いし、発達障害児とのプレイセラピーについての事例検討会を行った。なおこのシンポジウムはＧＣＯＥの発達障害プロジェクトとの共催で開催した。

〔研究成果〕

現場体験報告においては、話題提供者の発表内容と照らし合わせて個々の参加者が自らの学校現場体験を見つめ直し、何らかの気付きを得るというプロセスを積み重ねることとなった。そこには学校現場における自身の役割についての問い直しもあれば、そこから敷衍して心理臨床面接についての考察も生まれ、あるいは制度としてのスクールカウンセラーについての考察を深めた者もいた（詳しくはコロキアム報告書を参照）。

それぞれの気付きそれ自体がすぐに研究成果に結びつくものであったとはいえないが、今後学校現場というフィールドにおける研究を考えるための問題意識の萌芽としての意味をもっていると位置づけることができる。こうした問題意識を具体的な研究に結びつけていくことが、今後の課題であると考えられる。

また、十一元三教授を招いての発達障害についてのシンポジウムからも、多くの学びを得た。このシンポジウムの参加者の多くは心理臨床家としての実践を積んでいる者で、普段は個別の事例についての検討を行う機会が多い者が集まっていた。一方講師の十一教授はそれとは別の立場、精神科医として多くの経験を積んでおられるため、より包括的な視点の中からコメントをいただくこととなった。

これら２点をまとめると、自らの体験を基に心理臨床家（特に学校現場における心理臨床家）の専門性を検討するという当初の目的も達成され、それに付け加えて、学校現場で活動する上で不可欠な発達障害についての知識を得るという試みも実施することができたということになる。個々の参加者が自らの実践を考えていく上で、本コロキアムを通じて有意義な体験を提供することができたのではないかと考える。

（文責：西嶋　雅樹）